

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 5 日現在

機関番号：32514

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009 ～ 2011

課題番号：21720111

研究課題名（和文） ヨーロッパ・モダニズムにおける亡命ロシア文化の諸相

研究課題名（英文） Russian émigré culture in the Context of European Modernism

研究代表者

小椋 彩（OGURA HIKARU）

川村学園女子大学・文学部・非常勤講師

研究者番号：10438997

研究成果の概要（和文）：

アレクセイ・レーミゾフの画家としての活動実態の解明や作品分析を、その言語芸術に照らし行なった。露・米・仏の3カ国、計5か所でアーカイヴ調査を実施し、未公開資料を多数含む資料の閲覧・収集・整理を進めた。美学研究者とも協力して分析を進めた結果、レーミゾフの視覚芸術のテーマやモチーフに文学との連続性が存すること、またヨーロッパの芸術潮流、とくにフランスのシュルレアリスムとの繋がりを実証的に明らかにし、論文として発表した。また、レーミゾフをはじめとするロシア・モダニズムの日本における受容について比較文学的観点から調査し、国際学会で発表するとともに、欧米の亡命ロシア研究者と交流し、議論を深めた。

研究成果の概要（英文）：

For the past three years, I have been conducting research on the relationship between literature and the visual art of Aleksej Remizov, in the context of Russian émigré culture. The main focus has been the themes and motives of Remizov's visual art. I have visited five archives, in Russia, the United States, and France, and have carried out an analysis of Remizov's works, including several unpublished materials. In consequence, the thematic continuity between literature and Remizov's visual art has been confirmed. Some connections between Remizov and the European art school, especially Surrealism, have also been investigated.

From a comparative literature point of view, I have investigated the reception of Russian modernist works, including those by Remizov, in Japan.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
2011 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：ロシア東欧文学、比較文学、表象文化論

1. 研究開始当初の背景

ロシア人作家アレクセイ・レーミゾフは、亡命者ゆえに本国ソ連で黙殺され、長いこと研究者と欧米の一部愛好者にのみ知られていた。しかしソ連崩壊後は独創的作家として再評価の動きが著しく、2000-2003年には死後初となる本格的な10巻の選集が刊行された。一方、画家でもあったレーミゾフの画業に関しては、その文学研究が継続的に成果を挙げるのとは対照的に、調査・研究が大幅に遅滞していた。レーミゾフの視覚芸術は、相当数が戦争等で散逸した他、残ったものも、個人、もしくは図書館や研究所内の限られたアーカイヴが所蔵するために一般の目に触れにくく、未検証部分が多い。またそうした検証を行うのがごく一部のロシア文学研究者に限られ、比較検討や学際的視点に乏しいことも問題であった。

2. 研究の目的

本研究は、レーミゾフの言語・視覚芸術作品や、活動実態の分析を通して、彼の属した20世紀前半の亡命ロシア社会と、それを包含するヨーロッパ・モダニズム文化について検討するものである。(1) 本研究の第一の目的は、ロシア語散文の革新者として後継に多大な影響を及ぼしたレーミゾフの、画家としての側面に光を当て、より総合的なレーミゾフ像の構築をはかることである。

(2) 第二に、レーミゾフの創設した遊戯的秘密結社組織「猿類大自由院」の詳細を検討することによって、ロシア亡命文化研究およびヨーロッパ・モダニズム研究に新しい視点を導入し、亡命ロシア文化の、ロシア・モダニズムに対する位置づけ、ひいてはヨーロッパのモダニズム文化全体における位置づけを、具体的事例に即して、明らかにすることである。

3. 研究の方法

初年度は、日本におけるロシア・モダニズムの受容に関して、国内の図書館、おもに東京大学付属図書館、北海道大学付属図書館、国立国会図書館で関係文献の収集・整理を行うほか、レーミゾフの視覚芸術作品を所蔵する海外の以下のアーカイヴで資料の閲覧や収集・整理を行った。アマーストカレッジ(米)、ハーバード大学(米)。

二年目(平成22年度)は日本におけるロシア・モダニズム受容や亡命ロシア文化について前年度に行った調査を分析し、ペテルブル

グのロシア文学研究所で開催された国際学会で発表した(9月)。このときに行われた討議をもとに現在もより広範な調査を続行している。また同研究所のアーカイヴ調査を行うとともに、亡命ロシア文化研究者と意見交換した。とくに、同研究所に所属する、レーミゾフ選集の編集責任者アラ・グラチョワ博士や、アーカイヴ調査を積極的に進めるエレナ・オバトニナ博士らと意見交換するとともに、今後の共同研究について討議した。帰国後、日本ロシア文学会でこれまでの成果を発表した(10月)。

最終年度にあたる平成23年度は、イギリスで行われた国際学会で日本におけるロシア・モダニズム受容について、これまでの研究者との議論を考慮に入れて発展させたものを発表した(4月)ほか、ベオグラード大学(セルビア)で招待講義を行い(4月)、議論を深めた。さらに、フランスで個人蒐集家の所蔵品調査を行い(5月)、画集として出版されているものも含めて、作品の技法・テーマを、作家の文学作品と照らして分析した。22年10月日本ロシア文学会の発表原稿をもとにした論文を、フランスでの調査結果も考慮に入れつつ仕上げ、学会誌に投稿、掲載された。

4. 研究成果

レーミゾフの視覚芸術作品は近年、欧米の市場でも注目を集めつつあるが、研究の蓄積が浅く、活動実態の解明や作品分析は焦眉の問題となっていた。研究期間中、ロシア・アメリカ・フランスの3カ国、計5か所でアーカイヴ調査を実施し、未公開資料を多数含む資料(コラージュ、ドローイング、書簡、メモ等)の閲覧・収集・整理を進めた。これまでの文学研究の実績を活かし、美学研究者とも協力して分析を進めた結果、レーミゾフの画業の、文学とのテーマ的・技法的連続性を実証的に確認できた。亡命先のフランスで文学作品出版の道を閉ざされたレーミゾフは、30年もの間、画業で糊口をしのいだが、自らを、「画家」ではなく、「絵を描く作家」と名乗りつづけた。本研究では、こうした、「素人性の強調」には、作家が亡命前、文学作品のなかに執拗に書いてきた、卑屈でありながら尊大な自己像の反映が認められること、これはまた、彼の描く自画像にも認められるテーマであること、彼の画業の発展には、同時代ヨーロッパの芸術潮流の技法や思想との呼応が跡付けられることを指摘し、論文として発表した。

また、レーミゾフをはじめとするロシア・モダニズムの日本における受容について、比較文学的観点から調査を進めつつある。なかで

も、大正時代の刊行物のうち、ロシア人作家を描いたカリカチュアが掲載されたパンフレットの背景の調査から、ロシア・モダニズムの最大の移入者と目される日本のロシア研究の草分け昇曙夢の功績の他、これまでほとんど無視されてきた日本学者セルゲイ・エリセーエフの果たした役割を明らかにし、ロシアとイギリスの国際学会にて発表した。このとき亡命ロシア研究者と討議した問題点を考慮に入れ、ロシア文学研究所発行の論文集に投稿、受理されている（近刊）。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

① 小椋 彩、作家の戯画：「日本の雑誌」における A. M. レーミゾフ、世界文化空間の亡命ロシア、ロシア科学アカデミー・ロシア文学研究所、査読有、近刊

② 小椋 彩、「絵を描く作家」、アレクセイ・レーミゾフ、ロシア語ロシア文学研究、日本ロシア文学学会会誌、査読有、第43号、2011、1-9、
<http://yaar.jpn.org/robun/bulletin43/bulletin43>

〔学会発表〕（計5件）

① 小椋 彩、トカルチュクの『逃亡派』と新しい「紀行文学」について、2011年度日本西スラヴ学研究発表会、2012年3月15日、北海道大学スラブ研究センター

② 小椋 彩、トカルチュクと文学的虚構としての「作者」、第43回全米スラヴ・東欧・ユーラシア学会年次大会、2011年11月19日、オムニショアハムホテル、ワシントンDC

③ 小椋 彩、「日本の雑誌」と日本におけるレーミゾフ受容、英国スラヴ東欧研究学会年次大会、2011年4月4日、ケンブリッジ大学

④ 小椋 彩、レーミゾフの視覚芸術：可能性の枠を超えて、平成22年度日本ロシア文学学会研究発表会、2010年11月6日、熊本学園大学

⑤ 小椋 彩、レーミゾフ『クークハ』序文

と日本の亡命ロシア、国際学術シンポジウム「世界文化空間における亡命ロシア」2010年9月20日、ロシア科学アカデミー・ロシア文学研究所（プーシキン館）、サンクトペテルブルグ

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小椋 彩 (OGURA Hikaru)

川村学園女子大学・文学部・非常勤講師

研究者番号：10438997

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：